

に至るまでの部分にたくさん出て来るんですね。

そこで今日は、モーセの律法・モーセ契約と、そして、ユダヤ民族の預言ということについて、一緒に考えてみたいと思うんです。

ところで、ユダヤ人の最初の先祖は誰でしたでしょうか？ アブラハムという人でしたね。

アブラハムには息子が2人おったんです。

1人は正妻のサラから産まれて来た息子で、イサクという名前ですね。

もう1人息子がいました。サラの女奴隷にハガルという女性がいたんですが、彼女もアブラハムの子供を産んでるんです。ハガルが産んだ子供をイシュマエルと言います。

イシュマエルの子孫がアラブ人と言われているんですね。

イサクの子孫はユダヤ人ですから、ユダヤ人とアラブ人は、ずーっと先祖を辿っていったら共通の父親になるとよく言われているんです。

時間があったら、このことについてもまた ゆっくり話したいと思います。

さて、アブラハムから生まれたイサク、イサクは双子の息子を生まれます。

ところが、弟のヤコブという方が名代を継ぐんですね。アブラハムーイサクーヤコブ。

ヤコブという人は人生の途中で、神様から新しい名前をもらいます。それがイスラエルなんですね。イスラエルには12人の息子が生まれました。この12人の息子がそれぞれ族長となって別れ出て行くんですが、これが“イスラエル12部族”という言葉の由来なんですね。

ところで、イスラエルと12人の息子たち・その一族たちが生活していたカナン地の、この頃に大飢饉がやって来て、彼らは生存の危機に瀕するわけです。そうしましたら、カナン地のすぐ隣に、食糧があり余っている大国があったんですね。この大国こそがエジプトです。

そこで、イスラエルとその一族はエジプトに移住します。引っ越します。

そして、400年間エジプトで生活するんですね。

その400年の間に、イスラエル一族の人口が爆発的に増えるんです。200万とも300万とも言われています。それで、エジプトの王様/ファラオが、このユダヤ人・よそ者がこんなにたくさんになったということで脅威を感じ、また目の敵にし、そして大迫害が始まる。

とうとう神はモーセという指導者を立て、ユダヤ人をエジプトから脱出させまして、エジプトに入って行った400年前、自分たちの先祖が400年前に住んでいたあのカナン地に向かって戻るんです。

この約束の地に戻って行く途中、ある山の麓に行くんですね。その山の名前が“シナイ山”です。モーセはシナイ山の上まで登って行くのですが、そこで新しい“モーセの契約”というものをもらって帰ります。このモーセの契約の中に、ユダヤ民族に関する預言が書いてあるのです。

モーセの契約、シナイ契約とかモーセ契約と言われるんですが、この契約の内容をひと言で言いますと、「もしユダヤ人が神に対して従順に従って行くなら、神様と共に歩むなら、ユダヤ民族は祝福を受けます」と言うんですね。どんな祝福でしょうか？

「人数が増えます。ユダヤ人が住む所は繁栄します。彼らは何をしても成功します。ユダヤ人は国を持って大きな国になり、やがて、世界の全ての国のリーダーになります。世界の中心になります。ユダヤの文化が世界中の憧れの的になります。ユダヤ民族は押しも押されもせぬ、世界第一の高一い立場に引き上げられます」という祝福です。

しかし、「もしユダヤ民族が創造主を捨てて、創造主に反逆するならば、彼らには呪いが来ます」という内容なんです。

つまり、「良いことを行えば良い結果が来ます。悪い方を選択すると悪い結果が来ます。良い選択をすれば良くなる。悪い選択をすれば悪くなるので、良い選択をしなさい」という言葉なんですよ。

ところで、このユダヤ入門シリーズの中で、“神は全人類の中からユダヤ民族を選んだ”ということをお話ししましたね。ユダヤ民族を通して他の全ての民族が創造主を知るようになる、信じるようになるためにユダヤ民族を選んだ。

ユダヤ民族は、世界に対して創造主を告げ知らせるための教師でもあり、リーダーとなるべく選ばれたという崇高な使命を持っている民族なんだということをお話したのです。

そうしましたら、コメントを入れてくださった方があったんですね。

どんなコメントかというと、「ナンセンスだよ、そんな考え！」と言うんです。要約するとこうです。

「あらゆる民族は、自分の民族を中心とした神話を持って。どんな民族だって、我々が神に選ばれた特別な民族なんだと言ってる。聖書はユダヤ民族が書いた物語である。ユダヤ民族の空想で書いた物である。ユダヤ民族が“自分の国が一番なんだ。自分の民族が一番なんだ”ということを行わんがために書いているんだから、聖書の中で“ユダヤ民族が神に選ばれた”と書いたとしても、そんなことは当たり前で、そんな作り話に我々が付き合わなければならないという謂れはないだろう。」

そういうご意見だったんですね。

しかし、バイブルはユダヤ民族が空想で書いたんじゃないです。神の言葉です。

神の言葉をユダヤ民族が与ったんですね。

では、バイブルがユダヤ民族の手前勝手な空想物語ではなく、実在する神がユダヤ民族に与えた約束の言葉であるということ、何によって知ることが出来るのでしょうか。

3つのポイントでご紹介したいんです。

第1番目に、ユダヤ民族に対するモーセ契約の内容はね、“ユダヤ民族が祝福されてナンバーワンの国になります”ということだけが書いてあるんじゃないで、同時に呪いについても書いてあるんです。そしてね、祝福についての記述よりも、呪いに関する記述の方がはるかに多いんです。

どれぐらい多いと思いますか？ 祝福の4倍のページ数を掛けて呪いについて書いてある。

しかも、その呪いの内容・中身というのは恐るべき内容なんですね。

もし創造主から離れ、創造主に反逆するなら、ユダヤ民族は人口が減ります。何をやっても上手くいきません。国の中で伝染病が流行ります。四六時中、周りの国々から攻められます。

やる戦争やる戦争、ぼろ負けになります。やることなすこと失敗して、彼らは嫌われ、最終的には国を失います。そして、世界中に散らされて散り散りばらばらになります。散り散りばらばらになって

行った先行った先で、手厚く扱われるのではなくこっぴどい目に遭います。

祝福の内容の、掛ける4倍の恐るべき内容が書いてあるということなんですね。

もしユダヤ人が、自分たちの特殊性というか、選民である・自分たちは偉いんだということを言わんがためだったら、そんなことを書くはずがないと思いませんか？

呪いの部分が多いというのは、ユダヤ民族が契約を破ることを見越して書かれているという意味なんです。ユダヤ人たちはこんなにも凄い神から こんなにも凄い選びを受けて こんなにも凄い契約を受けているけど、破ります！ 守ることが出来ない民族です！ということを見越しているという、そういうことなんです。

もし自分たちがナンバーワンだと言いたいんだったら、絶対書かない箇所、書かない文章がそこに登場してるんです。ユダヤ人の空想で、手前勝手に書いたのではないんですね。

第2番目に、なぜバイブルが創造主の言葉だと言えるかと言いますと、書かれてあることが文字通り実現するからです。信じている人にとっては聖書は真実だけど、信じていない人にとっては聖書は真実ではない。これって相対的な話じゃないですか。

だけど、聖書の預言というのはね、読者が信じようが信じまいが、或いは、ユダヤ人が聖書を捨てようが大切にしようが、或いは、全人類が聖書を見下して“そんなの関係ない / 無視 / 読まない”となったとしても、人が信じるか信じないかはお構いなしに・関係なしに、聖書に書いてある預言は全部実現して来たんです。いいですか？ 全部ですよ。ユダヤ民族に関係する預言は、事細かな部分まで全部実現して来たんですねえ。人が信じるとか信じないとか関係ないんですね。

歴史の事実と聖書の預言を並べて読んでみることによって、この歴史が実際に実現する前に見通していた方がいる。そういう言葉があるというのを通して、“ああ、創造主という 時間を超越している神がおられる”ということ、認めざるを得なくなるということなんです。

3番目。呪いについて書かれてある文書ですよ。

なぜ呪いについてたくさん書いてあるかと言いましたら、1つには、ユダヤ民族を悔い改めに導くためなんです。神はユダヤ人を憎んで、そのように書いてるのではないんです。

ユダヤ人が、選ばれている目的を達成できるように、道から外れた時にもう1度元に戻すために、呪いの部分が書いてあるんです。

私たちの生涯も思い当たることはありませんか？

人間というのは“こうすればいいなあ”と思っていても、中々それしない。親から“こうしなさい”と言われたことは、大人になってから“そうやな”と思うんですが、若い時は中々そんなことしないですよ。反抗しちゃってね。

しないんだけど、最終的にそれを守るようになるのはなぜかと言ったら、守らなかった時に、人生においてこっぴどい目に遭ったからです。

ルール破っても良いことしか起こらないんだったら、そら、“ルール なんぼでも破ったらあ”ということになりますよね。

ルールを破った時に酷い目に遭う。酷い目に遭っても直らない時 こっぴどい目に遭う。
こっぴどい目に遭ってもなお それをし続けるなら、死にそうな目に遭いますよ。
死にそうな目に遭って“うわあ、痛いなあ。もうこんな経験こりごりだ。こんな経験 二度としたくない”ということで、心が少しづつ変わっていくんじゃないでしょうか？

ユダヤ人は呪いのことが書いてある文書を持っていますけど、この呪いというのは、神がユダヤ人を呪ってるんじゃないんです。神はユダヤ民族を今もって愛しておられます。
というのは、アブラハム契約で、アブラハムのゆえに、この民族は選ばれてるんですね。
ですから、ユダヤ人が今も神の選びの民であることは、何の変わりもありません。

そして神は、最終的には ユダヤ民族に与えている使命を実現するんです。
ユダヤ人が世界中の民のリーダーとなり、教師となるような時代がやがてやって来ます。
その時代のユダヤ民族の回復に向けて、歴史がグングングン進んで行ってるというのが今の時代なんですよ。

バイブルを通して、“歴史には方向性がある。歴史にはゴールがある。歴史には神の目的がある。歴史は、神が人類に立てているプランが実現していくためのプロセスなんだ”ということがよく分かるのです。

聖書の言葉は、具体的にどのようにユダヤ民族に実現していったのか。
それをこのユダヤ入門シリーズで、一緒に見ていきたいなあと考えています。
ですから、また一緒に付き合いたい願えたら とても嬉しいと思います。
ということで、まだまだユダヤ入門シリーズは続きますので、ぜひ皆さま またご覧ください。
それではまた『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。さよなら!!